

# 原爆文学研究会報

第一七・一八号

原爆文学研究会 二〇〇六年五月

読むなら笑うな、笑うなら…？

「セメント樽の中の手紙」を読ませたら、生徒がいつせいに笑い出した。——ある国語の授業での反応です（土佐秀里『セメント樽の中の手紙』と探偵小説）／「早稲田実業学校研究紀要35号」平成13年3月）。葉山嘉樹の「セメント樽」といえばプロレタリア文学の代表格。石と一緒に破砕器へはまりこみ肉片と化した工場労働者の死が、女工の手紙によって「私の恋人の一切はセメントになってしまいました」と語られる、なんとも切なくやるせない短篇…の、はずなのです。

笑った理由を問うと、生徒は「まるでギャグマンガだ」と答えたといえます。土佐氏はこの生徒たちに「想像力の欠如」を指摘し、「このような反応を自由な感想として放置しておくべきではない」と憤まんをあらわにする一方、作品内で確かに認められる〈笑い〉の可能性について、根気強く分析しています。

字面を変えず何世紀も生き続ける文学作品と、刻一刻、変容していく読者たち。両者の折り合いをどうつけていくのか。〈原爆文学〉だけがさらされている問題ではなさそうです。土佐氏の報告を読みながら、数年前のことを不意に思い出しました。『日本の原爆文学』（ほるぷ出版）第13巻の目次を見たときの、自分自身の反応です。収められている句集の章立ては、「阿鼻叫喚篇」「ケロイド篇」「後遺症篇」。字面にひるんでそのまま本を閉じました。

面くらった反応との折り合いは、いまだにつけていません。

（内田 友子）

## 第一七回 原爆文学研究会報告

二〇〇五年十二月一〇日  
（土）広島大学東広島キャンパスで開催した「第一七回原爆文学研究会」には約二十五名が参加。

畑中氏の発表については、「何をもって原爆の表象の〈典型〉と見なすことができるのか？」「〈被曝〉をあらえて〈被爆〉ととらえることにはどのような可能性があるのか」等の質疑がありました。

水島氏の発表については、「類似性だけでなく、栗原貞子と原民喜との差異に眼を向けると何が見えてくるのか」「栗原貞子のエッセイにも目配りが必要ではないか」等の質疑がありました。



## 原爆を表象する典型をめぐって

——被爆の経験とどのように出会い、出会わないか——

畑中 佳恵

『広島 記憶のポリティクス』で米山リサは、《多くの人間にとつて、なぜ広島は過去の過去と現在を知る必要があるのかは、自明といふにはほど遠いのだ》と述べた。翻つてみるに、私たちが「原爆（文学）」を「研究」する行為は多くの場合、その存在意義を暗黙のうちに前提してしまつてはいないか。いま、この私が、原爆という出来事をめぐる他人の経験について考え、発言するとはどういうことなのだろうか。報告前半では、「原爆（文学）」について語ることを身近にしてきた、報告者自身のこれまでを自己分析した。北九州市で一九八〇年代に平和教育を受けてきた報告者にとって、「小倉原爆」という言説は強力だった。ほかに「唯一の被爆国」言説、「原水爆で全滅する人類」言説を想起しつつ、自分が「小倉人」「日本国民」「人類」として主体化されてきたことをまず確認した。

近年の報告者は、これらの言説を分析・批判することで「原爆（文学）研究」に関わつていく。この方法からは、〈言説の指す出来事としての原爆から距離をおき、その他人の痛みと自分との連関を問わない〉という問題点が見出せる。いわば看過できない死角があるわけだが、この死角はさらに、〈なぜ、他でもない原爆被災という過去の連関（だけ）が重要視されるのか〉という死角を抱え込んでいる。

私たちは物理的な限界をもつ存在だから、現在・過去のあらゆる痛みの当事者となることはできない。かといって「原爆」を象徴化して関わることは、具体的な当事者となることから遠ざかる姿勢で

ある。また例えば、「ポスト核のこの時代、被爆に関しては誰もが現に当事者ではないか」という物言いは、個々人の当事者性を突きつめることを放棄する態度にもつながるだろう。

死角そのものをめぐる考察はこのあたりで行き場を失い、報告者はまた、既存の言説の分析という作業に立ち戻るしかなかった。が、死角の性質を明らかにするような視点で分析することで、「来た路」を撤退するのではなく、「行く路」の模索となるような螺旋状の回帰にしようとした。これが報告後半にあたる。

具体的にはまず、長崎で発行された文学同人誌『地人』（一九五五年三月～五八年二月）をとりあげた。当時の長崎では、永井隆的な「神の恩寵」が原爆の典型的な表象の一つであったが、これが新たな表象（例えば、長崎の「漁場と工場」が犯される経験として被爆をとらえるもの）によつて乗り越えられようとする場面を分析した。また、この新たな表象が典型化しようとする周辺に、現在の死角と関わる表象（例えば山田かんの、被爆者像を複数化する詩など）があつたことに注目した。ここから、前述の死角は古くて新しい問題であることがわかる。

最後に、典型的な表象との関わり方として、比較的最近の例をとりあげた。現代美術家の会田誠によるマンガ『ミュータント花子』と、青来有一の小説「石」である。両者は一見かなり毛色がちがうが、〈集団的な記憶・典型的な表象をもつてしか原爆に出会えないもどかしさ〉を共有しているだろう。これから先の事態として、原爆の典型的な表象とすら関わらない「私たちの他者」を想定する必要を考えさせられる。そして、そのような他者に向けて語りかけるとき、前述の死角をめぐる考察は再々度浮上すべきものとなるのではなからうか。

## 第一八回 原爆文学研究会報告

二〇〇六年三月二五日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第一八回原爆文学研究会」には約二五名が集いました。



内田氏の発表については、

「東海道戦争」と「となり町戦争」に従軍慰安婦や植民地のことが折り込まれているとして、それは、寓話として成功しているのか」「被爆体験講話者への政治的発言の自粛問題については、単に自粛を要請した側に問題があるということではなく、語り部の声が（戦争に実感を持ち得ない今日的な感覚）に届きにくくなっているという状況を構造的な問題としてとらえ、より多角的な観点から検討する必要があります。」

楠田氏の発表については、「聞き書きの製作過程で話者自身が推敲すると、強く訴える力があつたものでも類型（概念的で杓子定規のもの）になっていってしまうという問題をどのように考えれば良いのか」「写真にも撮影者や編集者の選択によって意図が働いていることを考えると、何が消えたのかということにも注目する必要があるのではないか」等の質疑がありました。

### ◇ 研究発表1

## 「東海道戦争」と「となり町戦争」

——手もとから始まる戦争——

内田 友子

昨年直木賞候補にあがつた三崎亜記「となり町戦争」（小説すばる）二〇〇四年十二月号、第17回小説すばる新人賞受賞）を読んだ時、筒井康隆「東海道戦争」（SFマガジン）一九六五年七月）を思い出した。前者は隣接する町どうしで、後者は東京対大阪で、一見原因不明の戦争が勃発し、主人公はその（戦争）に巻き込まれる。（戦争）は、「東海道戦争」ではスラップスティックの手法によって騒々しくカタストロフィを迎え、一方「となり町戦争」では「公共事業」としてあくまで事務的に計画的に、収束へ向かう。

ほぼ四十年を隔てる上に作風もまったく異なる二作だが、「犯人の名指し」ができない戦争、言わば、責任の所在が不明瞭なまま成立する戦争を描いているという共通点を、特に興味深く感じた。なお筒井康隆がこの点をさらに直裁的に描いたものとして、『三丁目戦争です』（講談社、一九七一年四月）も発表の中であわせて紹介した。

また発表では、「戦争の始まり」「戦争のイメージ」「肉体の損傷」「戦争という事件への期待」「戦時下の性的な欲求処理」「原爆、軍事力」「戦後処理」などの共通項目を設け、それぞれの作品における描かれ方を参照し、どちらも、主人公がイメージするあるべき戦争のかたがたが崩されていく様子を確認した。

戦争を描いた文学とは言え「となり町戦争」も「東海道戦争」も、一九四五年に終結したあの戦争にかかわるものでは、もちろん、ない。戦争体験者も登場しない。荒唐無稽な設定の中で両作品が追及しているのは、今後起こり得る戦争の可能性である。しかし、それが先の戦争とその後の社会動向を踏まえたところから導き出されているのは言うまでもなく、これらは先の戦争が後世に及ぼした影響を現在の視点から解説した作品だと見ることが出来る。この点について、今年三月に新聞で取り上げられた、被爆体験の講話に対する「政治的発言自粛要請」の問題を視野にいれながら考察したいというのが今回の発表の関心であった。

発表者の念頭には、数年前に取り沙汰された、語り部の話を静かに聴かない中学生たちの問題があった（『原爆文学研究1』の拙稿参照）。そのため、この度の「政治的発言自粛要請」問題についても、講話者（＝語り部）と聴講者（＝中学生）の間に横たわる齟齬を解消するために「要請」が機能するのであれば、それは積極的に議論されていいのではないかと発表者は考えた。本発表で取り上げた二作品、特に「となり町戦争」では、戦争という状況に対してどうしても実感を抱けない世代の戸惑いや焦燥が描かれており、それは、戦後世代が自覚し得るひとつの切実な「実感」である。それをこの「要請」問題の延長線上に位置づけながら考察したかった。しかし参加者から、講話者と聴講者の問題以前に、「要請」が発せられた（それこそ）政治的な意図や背景をもっと慎重に考慮する必要があるという指摘をいただいた。

今回の問題を文学的な試みへ結びつけて論じる前のステップとして、「要請」問題の経緯（被爆体験講話の内容に寄せられた意見や、長崎平和推進協会が「慎んでいただきたい」として例示した8項目など）を改めて具体的に掘り下げて再検討したい。

#### ◇ 研究発表表 2

### 原爆文学とルポルタージュ

——方法をめぐって

楠田 剛士

一九五三年に開かれた座談会で大田洋子は「もう体験者でない作家が書く段階がきてる」と述べ、原爆を描くことについて、「普通の人材でないんだから、記録文学としても新しい方向がある」と語った。大田はその「新しい方向」を示すものとして数年後『夕風の街』と人と一九五三年の実態『』を執筆するが、阿川弘之もまた大田洋子と同じく、一九五三年の広島を舞台に、作者をモデルとするような作家が取材して廻り、一九四五年八月から現在に続く原爆の問題を浮き彫りにする物語を描いた。『魔の遺産』（初出一九五三年）である。

本発表では『魔の遺産』を対象に、直接被爆していない自分がどのように原爆を描きうるのか、あるいは先行する原爆の小説・エッセイ・証言等をどのように読みうるのかという問題を、ルポルタージュの表現に注目して考察した。

まず、作品に描かれる広島が、原爆写真集に写された広島の写真と喚起させるものであることを確認した。『魔の遺産』発表の前年、一九五二年八月に「アサヒグラフ」の原爆特集号や岩波写真文庫『広島』等が発売されたが、その被爆写真集（の写真）を通じて二次的に「原爆」を見ることが一次的な経験として人々に定着していく一端を窺った。

次に、阿川が先行する被爆体験者のテクストを引用・変形して描いていることを確認し、その問題を考察した。第三章の被爆者の座談会の場面では、蜂谷道彦『ヒロシマ日記』（阿川が参考にしたのは雑誌初出の「広島島の原爆雑話」）から、全編に渡る主人公の従弟の病気に ついては、林芳郎『一郎』から、それぞれ引用・変形がなされている。こうした先行テクストの再構成（語り直し）は、新しい原爆文学を編成する方法として注目できる。

またこの当時のルポルタージュの意義として、取材過程で行われる聞き書きが、被爆手記を書けない人々の「声」を記録したのではないかということも提起した。山代巴らの「原爆被害者の手記」編纂の活動における、「書けない人々」の「代筆」のような役割を担ったのではないかということである。

それら試みは、一方で、元のテクスト（発話）にあつた独特の語り口を平易なものにし、普遍化した被爆者像を立ち上げてしまう可能性もある。生々しい現場を描くルポルタージュの表現が、ある類型化に陥ってしまうのではないか。類型化がどのような時期にどのように形成され、どのように脱・類型化するののかについては今後の課題としたいが、「原子爆弾から始まる諸々の影響のデテイルまで追求し核心に迫る態度」（山田かん）が、なお求められていることは確かだろう。

## 似島小紀行

中野 和典



海の静けさに戸惑いを感じるほどだった。一二月の研究会の翌日、坂口博氏・中原澄子氏とともに広島市の南に位置する<sup>にのしま</sup>似島を散策した。宇品からフェリー（写真右上）で二〇分。島の北端に聳える「安芸小富士」<sup>あきのこふじ</sup>（中央上）が乗客たちを迎えた。



軍の検疫所や特攻隊の訓練基地があつたこの島では、八月六日から被爆者を収容。五〇〇〇人分の毛布も瞬く間に不足し、その一夜だけで六五〇名余りの死者があつたという（『ふるさと似島』二〇〇三年七月）。その惨状は中沢啓治『はだしのゲン』にも描かれており（左上）、似島は多数の無縁仏の眠る地となつた。

船内で無料配布されていた地図を手に原爆犠牲者の慰霊碑（右下）をめざして島を横断。碑は、ひっそりと冬の陽射しを受けていた。あまりに形状が抽象化されるからだろうか、私は慰霊碑の前に立つと独特の虚しさを感じることもある。死没者たちのことを思い、碑を建てた人々のことを思っても、いや、思うと一層その虚しさは増すようだった。石に刻まれた「慰霊」の文字は、水平線をいつまでも見つめていた。



## 彙報

### 第一七回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇五年二月一日(土) 一三時より
- 会場 広島大学東広島キャンパス教育学部A棟103号室
- 内容 研究発表

原爆を表象する典型をめぐって

——被爆の経験とどのように出会い、出会わないか——

畑中 佳恵  
水島 裕雅

### 第一八回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇六年三月二十五日(土) 一三時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号室
- 内容 研究発表

「東海道戦争」と「となり町戦争」

——手もとから始まる戦争

内田 友子  
楠田 剛士

### 機関誌 「原爆文学研究」 第五号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」第五号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇六年七月中旬、データファイル (Word か一太郎) を添付しての投稿の場合は七月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 原爆文学研究会事務局(住所・連絡先は会報末)。データファイルの場合はプリントアウト原稿を添えて郵送して下さい。

### 原爆文学研究会事務局の移設

石川巧氏(現・立教大学)の異動にともない、二〇〇六年四月より原爆文学研究会事務局を波瀾剛氏(九州大学)の研究室に移設いたしました。

### 編集後記

諸般の事情により、会報が合併号になってしまったことをお詫び申し上げます。今年も機関誌「原爆文学研究」の編集作業をする季節が近づいてきました。玉稿をお寄せください。(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一―一六五二〇 福岡市中央区六本松四―二―一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail [tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>